

貞丈雜記

十五下

73

6592

30





門 7 3  
流 6592  
卷 30

陽數三部

物數三部

一 祝儀は七五三の数を多用する 一三五七九を陽数とし  
二四六八十を陰数とし 陽ハ物を生ず 陰ハ物を殺す  
氣ハ陰ハ物をかゝる 氣ハ陰ハ物を殺す 祝儀ハ陽數  
を用い 陽數の内より 初の一と終の九を捨て 中の七  
五三六より 又ハ陽氣のさうんある所を取り 又ハ心  
也物の初ハ一 終ハ九と云ふ 依り 初の一と終の九を  
除く

一 神道は八の數を以て數多き儀と云ふ 一より十迄の

天地の間の氣の  
比ハ陽氣を陽  
といハカガサ  
陰氣を陰といハ  
カガサハ陽氣を  
陽といハカガサ  
有氣を陰と云

昭和九年四月五日  
三上重吉 贈



内初の一と終の十とを控て残る教分は始も終もあかきりあき心は八百方八千代八雲あとの八の雲皆取らるる教あき依あり

折一合と云は二のりて心抱る人をあやまりあり  
了のりてまじりて茶物を一合二合と云は唐櫃  
あども一合二合と云は二のりのりて合八盒の累子  
之盒はまことと云ふなり

一具と云は何れも對は掛ひたる物を云わうけ行  
膝テウシはあか袴肩衣もる備あとの靴は一具と云  
襪子をバアと云は二枚と云は糸くすすあり

鞍クラ古轡クラバ一口とあをひとくちとよむいはあしつと  
よむべし上古の書は太刀の草を。一口二口とあり又

袴一口鈴一口あともあはれもいづともむし

一禮ハ一領と云禮ふかぎらず小神をも一領と云は領を  
あをよむむさくあをの背するものハ皆一領と云

一胃カストヒトハ子一割と云ハ敵の胃を云剣之武難書礼書篇云胃  
一割をねと云まきると云るはあしと割の字ハ首を刎

るの字之依は身方の胃をハ割と云るをいして一頂と  
いふは頂いしとくともあく真衡の況く世と一頂  
といふのりを知ぬ人なり

節用集胃一  
割此字ハ忌テ  
不書也



駿中日記云詰  
 奉公山田の二尺  
 云々奉公山田の  
 奉行方を奉公  
 元と云山田の氏也  
 志仁別記云雜堂  
 船二鯨ト云真  
 一尺斗ナルガ飛入  
 ケリ疎忽ナル者  
 取テ海一投ハケレ  
 ハ暫有テ鯨一尺  
 飛入又云々是ヲ  
 見レバ鯨鯨ニモ  
 限ラズ一尺ト云

一 鮭サケ小かざりて一尺二尺と云はあらず大草取お借り  
 書し鯨一志ゆくと有り一尺二尺と云いされつるひら  
 あらず一尺以上の魚の大なるをバ一尺二尺といふは

又云鯨を一尺二尺といふハ一隻シヤウの音をうて云あらず  
 と云後あり隻の字ハかろくとよむあま一隻といふ  
 ハ一ツの字ニ鯨小かざりて一隻といふハけもあらず何れも  
 可の字をハ一隻といふべきであらばハ後も用かろと按  
 ずるよあり記せぬ大草流の書ハ鯨を一尺と  
 いハ鯨も鯨も奥州より出る魚ハかの國の初を云  
 て魚を一尺二尺といひ習ハて鯨鯨を他國へ送る

一 尺二尺といひてつゝのハたる他國も云々細をうけ  
 て一尺二尺といひ習ハたるあま一尺ハ昔奥州の國初  
 出るあま一

一 弓小一ちの二ちの云々弓のけづりハ世をあま  
 不くとにぎうと一極を一ちの云々弓馬秘流出れ  
 雜々書すあり

一 弓を一尺二尺と云々一尺二尺と云々ハ是草取  
 少書す云々と國書記ハ是をう一尺二尺と云ハせず  
 弓は射場言場あどの有教をうの時弓は元一尺と  
 云々のをうて云々云々

一 一尺二尺の多軍  
 傳書す云々  
 云々ハ弓の強  
 の多々二尺の  
 と云ハ二張の弓  
 之とあり是を  
 弓杖を射射の  
 弓と



一 たうびう「おのりたるげう」の事の定あぐりたる調度  
の教りたる事

一 物の寸尺を定むるに在りし陽教を用びし陰教  
を用びし陽教ハ一三五七九之陰教ハ二四六八十之又音  
といたとハ二丈四尺とすもおは是ハ陰教あり一すの  
又一分う三分も餅付をせし是陽教を用むじ  
凶ありしとハ三丈五尺とすもおは是ハ陽教あり  
二すの又二分四分も餅付をせし是陰教を用む心  
陰陽の教をりけて用むる音をりたる音をり  
ハ礼あり

節用集云弦  
廿筋曰一桶七  
筋曰一張一コハ  
三筋也ト見ユ

一 酒一献二献一度二度と云るハ酒盃と教り記也

一 弓の弦ハ一條二條と云又一筋二筋とも云フ弦と云ハ  
七筋を云一桶とハ廿一筋之桶と云ハ已けおし下  
りけ物ハ廿一筋入て逢上とすも是替法を上古ハ副弦  
とも殺弦とも云

一 一は不をハ了すと云へし一不二不とハ不云

一 墓目一腰と云ハ四のりし大追おの寸のりし  
云云と云ハ一束とハ廿のりし廿一以上ハ廿一廿二と  
いふ又異説ハ一束とハ四十のりし一把とハ廿一の  
りし是仁田右馬助の説ハ射と射をりし時説



用ひつゝ

一 矢二束を一手と云ふハ的矢はかぎりたる事之外の  
矢をバ一手二束といひの事しきこ一ツ二ツ一束ト二束ト  
と云べ一但一手四目一手神政あるハ一手つゝらへる  
ふれバ一手といふべし

物の数の云様武雜書札道照愚案よありあり畧之  
保侶衣をバ一領二領と云保侶衣一領と三代畧録より  
奏教をバ一杖二杖と云奏教ハ祈禱の札也 木の枝ハ舟也 又一束と云也  
涉稜をバ一合二合と云是ハてり舟ヲ入るる舟ハ 一合ニ合といふ事あり 古案云々  
勢者書札案よ名つゝ 大永五年の古案云々

一 考の教をひと羽や二羽と云ふハ 稽の羽は限りたる事  
外の考よりいふべしと云はれと云祝あり 外の考ハのちを  
にもとめり

一 神子をバ一元と二枝と云ひハ 神子をバ一口二口と云べし又  
神子をバ一口二口と云ふハ 神子

一 小神一重と云ふハ 小神の款よりしる事  
厚風がくを一つと云 原氏云々事 又一隻と云ハ一重の  
事あり

一 志月ハ一杖と云也人唐記ハ一杖と云一頂と云べし  
箴をバ一ツ二腰と云保元物語ハ元を云ふ

一 臺又ハ臘燭の教を一挺二挺と云ふハ 挺ノ字ハつ元と  
しむ字ハ臺もらうと云くも枝のこゝろ細長き物也



一挺二挺と云く何れも布を毛き物を一挺二挺と云  
ハ皆同じ心一丁二丁と書ハ挺の字むづろ一きり  
略して挺の字の代り丁の字を修り目録に

一輿コシあを一丁二丁と云ハ丁ノ字あると云む字も

一人あて二人あてと云む一人一人二人まると云む

一布ヌノキヌ縮あどの敷一疋を一匹とも云く又一むろ二むろとも  
いふ之字拾遺物語七布一むろよりいふこれあの

男又とらせよ畧中ハ布一むろころもたれば男あをもす

あり不得とらうと思ひて云く日本記孝徳天皇大化二年記 田一町

縮一丈四尺成疋ムラト云くは疋ノ字ムラと云む也

一綿ヒタイノボン敷屯と云屯の字ありむると云心軍陣の人数を

屯すると云も人数を集むを云綿一屯の時ハひと

かりと陰之偏名抄ハ唐令三云綿六兩三為屯屯ハ聚

也倍一屯トモ後疋トモ度毛遲トモ

一晝夜の時の敷をおろす晝六時夜六時子の時を才一と

く屯の時を才二と寅の時を才三と卯の時を才四

と辰の時を才五と巳の時を才六と未陽の時を

才七と申の時を才八と酉

の時を才九と戌の時を才十と亥の時を才十一と

是陰の時子時の敷をおろすの一時を十の敷ハ定也



才一の時をバ一そうに流して才九つをおく子時 才二の時  
 をバ二をバおどして才九つをおく巳の時 才三の時をバ  
 三をバおどして才九つをおく申の時 才四の時をバ五をお  
 びして才九つをおく辰の時 才六の時をバ六をおく未の時  
 才七の時をバ七をおく酉の時 才八の時をバ八をおく戌の時  
 才九の時をバ九をおく亥の時

一 屏風一よりひとの二双のりく一ひつとひかき 子若下より茶社  
はあみつゝ二よりひ 皆一對二つのりくは氏 日本記は一具  
 の字を一よりひは氏 せたるおの具足は氏 たるをよりひ  
 とくくは氏 道具は氏 たるをよりひ

言語之部

言語のこまをを知らざれば書を  
 よめよ心持かききるあり加記之

一 何ういふ殿と云ふ殿は官殿の殿して殿飛のりくは氏 一の殿飛  
 をあまは氏 人神ありやまひて何ういふ殿と云ふ  
 たとへば右神宮八幡字あどの字の字の心へ海人  
 藤友云於テ内裏殿ト申ハ執柄家之外不可有ハ  
 関白殿ハ意兼ハ其攝政殿何事ヲ申サルハ其位ハ  
 お申スニ徳人無異代也親王ヲバ於前何殿トハ  
 不也

一 何ういふ板の板上古よりありく之系於將軍時代也



つれなきある  
 ほかさぬのり  
 き女房トアリ  
 内方ト云二回  
 シ廻  
 永享九年將軍  
 義教と源倉兼  
 領持氏ヲ征伐セ  
 ン為二事ヲヨセ  
 富士見ニトテ駿  
 何ニ下向セラル  
 時飛鳥井雅世歿  
 供奉シテ皇土記  
 行ヲ書レシ其先  
 瑞ノ文ニ公方極富  
 士御覽ト書レク  
 リ此頃既ニ極ノ  
 事ヲ用ヒタリ

應永記小大書  
 揚テヤウ天下  
 と五及の名跡大内  
 左系大夫義教  
 道をそれと思ん  
 自のともハ方極  
 法而極のゆめ小  
 かけよと名案  
 かけく疑ふも  
 所所極とハ義  
 端をきく之  
 ○藤倉年申行吏  
 藤倉年不  
 多ヲ皆何極  
 ト書テアリ事  
 徳二年ニ書タ  
 ル書之東山極  
 代ナリ

以方極等持院殿極あど云ハ中以下ありあはし  
 されども平人極をなぐり多ハ旧記は見えず書札の  
 旧記も皆殿をうりて極の所法あり道照思之草  
 云何殿極の極の字のあり正法ハありきり  
 但夏より書多と云極の字當極のやうハ  
 以とも正得ありと云之能く可加分別云用害記  
 云云道才正状ハ先代を何院殿極といハて書  
 持院殿とバウリ在る事勿論之右極方は分也  
 和云云ル人ヤハ一箇正代ハ所就所不を極と  
 書ヤるも又可也此記云云右あり院殿と殿中ん

一書ヤる一院と云ヤハヤ極之云々真丈極系旧記  
 一ハ以方極と何又新極とあり上云極下云極と云々  
 一も有是ハ極と云方とバウリ云々ハ一ハ極と云極  
 一以方極といはし以方むきと云云ハ新極ハ極むき  
 一と云極ハ上むきヤ極ハ下むきと云云ハ太平記廿七  
 一左云傍智欲<sup>ル</sup>謀<sup>セ</sup>所<sup>ト</sup>志<sup>コ</sup>条<sup>ノ</sup>執<sup>ル</sup>事<sup>ト</sup>極<sup>ノ</sup>引<sup>ル</sup>出<sup>ル</sup>物<sup>ト</sup>云極も  
 一殿中極のあり内々兼ハ一と云新極飯系を御り  
 一云々殿中極とハ殿中向といふこと  
 一何寺何院何軒何庵何富云々寺院軒庵無事  
 一皆何殿の殿と同意あり極是云々ハ殿文字皆事



事上古の法之系於將軍時代より申比より殿々  
を付てよびありて一曰記は善法寺殿聖徳院殿  
之室院殿実相院殿ありてあり本式ハ殿文字あり  
しきあり

一昔ハ祝儀の多きは病氣と云るを睡て病氣といひ  
て歡樂といひける昔ハ祝儀を多しと云ふ故なるの  
詞中にも多きを言ふたると又祝儀ありて殿中次記云  
まても歡樂といひて趣旧記は是れ殿中次記云  
依歡樂不泰之時兼日以清文狀て之云て殿中  
目く記云寛正六年正月  
十四日之案殿中一獻如例檢校  
殿中侍入夜松所庭

東鑑卷三十三云  
嘉禎二年丙申  
正月小一日巳未  
晴挽板抄法  
今日不被上法  
蓋依歡樂  
出座之故也云々

和齋能立之昨夜之觸申涉方く涉何儀之外爰如  
始涉何儀并涉供元以例年涉何儀但一色式類少  
補及細川右馬殿殿以由不無に儀依歡樂記云  
樂と書てより二びきたりしむと云ふ之痛と云ふを忌  
て飲あといかナシ梨子といふるをありのこそ云ふ同し  
心之さうろを云々梨子の無シト云  
心ニテイムナリ  
一貝合セといふはよろしかりぬ詞記貝お不ひといふ  
魚一又貝おひと云へて嫁入記はおひ貝おけあり  
貝お不ひといふはつとて孝深年盛表記明月記  
等も元たり又和坊法師の言ふを云ふ



天子ノ作ヲ書ク  
ル文ヲ宜ク守ル  
頼政ノ言ヲ守ル  
法書文ニ示トス  
レタル一未幾不  
ク二見タリ是古  
風也

このころのこともうを具ありせとおわめなるにあれ  
ばつひあつせともいつくきりあれども款合番合符合  
根合番の合は結る、故具おわひといふをよとす  
— 貴人の合符をおあがりは膳おあぐと人のつひの結き  
初といふは供所といひ多しとも公家方では供  
所と申すとも申す

— 示といふ詞を今時の貴人へ對してはありがごとくと云  
ふ古のあきまりは古の公家方へ示と申す中へ武雜書に  
篇の乾何と依て成下所内書は海頂載先以示を存は  
又云去月廿八日所教書今月三日玉来畏頂載仕はむ

示を存はあぐと云又言あり所内書は所教書と云  
方極の由書書之それを頂載して示といふ之能はと  
いふ詞は近代のあつはは貴人へ對して云ふ示と云  
ひか下とすの兼もあつと云ふはたは穢き者ハ貴人  
へ對目あるあり難きりあるふめし出されて所  
目よかす難しとすの兼もあつは目よのしと云  
悦ぶむし又悦がむ書物をも悦がむとすのけもあ、  
ほむむと悦ぶ心之難し兼あきと云悦し  
— かしむもの云はおとるありて貴人一人の威勢をおと  
る心之畏の字をかしむものあつと云ふ



畏入の事なく云々古き状あるはむしと時ひき  
 せうくもをかこもれくとも貴人をおそれしこ  
 てしす。心むねむるもあまをかこもるも  
 是も貴人の作をおそれ薄くむね羊知まをさし  
 せむひかをおそれしこもれをわこもるも  
 かこもるも貴人をおそれしこもれをわこもるも  
 府まをこもるも貴人をおそれしこもれをわこもるも  
 いしこもるも貴人をおそれしこもれをわこもるも  
 宿まをこもるも貴人をおそれしこもれをわこもるも  
 通昔日をば上見云々又出りしこもれをわこもるも

古記ニ荷用ト  
 アリ官仕ノ事也

一 師うよひといひ又師うよひといひ出家仕の事テナガ  
 云々出家仕の事と心むる人あり師うよひといひ出家仕  
 師次シヨクニチの習と持行て出家仕の事チヨクニチといひ出家仕  
 一 出家方よハ酒を九クニん餅をかちん味噌をひクニ塩を  
 志らぬあまをいふ系於將軍官物よ吳名を付し系於將軍書並札系於將軍海金漂芥と云書よん系於將軍  
 院僧心の系於將軍書並札系於將軍海金漂芥と云書よん系於將軍  
 其以於軍家の女房元もそれを学びて吳名を系於將軍  
 されしこもるも貴人をおそれしこもれをわこもるも  
 弓射るとしり能ゆ弓を射るとをの字添ていふゆき  
 的出張記よん入たりしこもれをわこもるも



一 今時人の兄をあたきといひ伯父ををぢきあぐらう  
阿にきこをちきみとふを其をこの字を畧してきこ古  
ハ兄君伯父君あぐらうといひし

一 あにごあふごぢうこぢうごあどのごいほの孝こや  
まひて弟と云ふは弟ハ弟を畧したるこあはあ  
祿はあといふは一説はあにごあどのごいほの孝こ  
といふあやまうこはあ母はあはあ娘はあ  
と何者より有り

一 父の字を者の人かやぢや人又おやぢやものといひ母の  
を母ぢや人といひ兄の字を見ぢや人あぐらうといひし

世の人父の字をぢと云はあぢや人と云ふの字を  
あぢと云ふ

又伯仲叔季ト  
云事アリ伯ハ統領  
ナリ仲ハ二男ハ叔  
ハ三男ハ季ハ四男  
也伯父仲父叔父  
季父ト云モ皆事  
也又ノ三ハシノ身  
ヲ叔父ト云四ハシ  
ノ身ヲ季父ト云  
父ノ兄ヲ伯父ト云  
ヲ也

一 おぢの字を伯父叔父といひおその字を伯母叔母と云ふ  
係ハあまもむ叔ハおとよむとされバ父の兄ハ伯父  
父の弟ハ叔父又父のあまハ伯母又のいもとハ叔母  
母の兄もおとよむ近世又盲ある人伯叔の只け  
をあまといひ父方のおぢおをを伯父伯母と云ふ母方  
のおぢおをを叔父叔母と云ふる人ありあやまう  
一 難合期又不合期あぐら 舊記はあひるあぬ  
いふこと







一人の事も秘してその由りともいふおやせうともそのお内か  
 どもいふ事もあるいどせうは出はせといふ事あり  
 これら八人も秘して秘してかぬ事あれども古より此  
 風俗の傳りたる事ありかやの事もむつとせぬが不審な  
 あり物あり記之今の人の知る事後より知るぬ  
 始よありし

一 故實コキツと云詞ハ唐土の書より出する事史記魯世家記  
 云故實故事之是也云々いふハ故實といふハゆきさるのよ  
 き事と云ふことと云ふ也又文選四十六卷に云故實先王  
 之道也云々いふ故實といふハむづの天子禹王陽王

文王などの定の事れりるをいふ云々日本といふも  
 只那方といハ昔神武天皇以来定めの事と云ふ事あり  
 といふ武也といハ頼朝依以来定めの將軍などの定の事  
 也といふ事あり故實といふむづの法武の事あり故實といふは  
 祝儀といふ詞の事書札の記事あり  
 一 福あき人を云々といふ詞近世の詞あり昔よりあり  
 鎌倉年中行ふ正月十七日沙的の事といふ是の人村中  
 人数といふ詞ハ法合力勤之といふ又昭和三十二年諏訪  
 左近大夫貞説る格別雅い故實といふ是は條親侯者加  
 扶持といふ昔知れを宛行ふ所ハ何貫文といふ事あり



式ノ眉ふとを四季  
の眉と心ほく四季  
よりして作。越か  
る。あ。く。こ。あ。  
や。ま。り。之。式。の。的。を  
四。季。の。的。と。心。ほ  
く。あ。り。あ。や。ま

故宛行あき人をまきとて料理はあきとて

くと思ふと云何日記は有り花飾と書くと何の何

結構と云何同。過職と書くる本もあれとあやまらん

合点と云何書札の款よりあす

式正と云何旧記は有り是ハ親式を正し時の事又式と

汁のり同意之式正の時式正の膳式の立又式の大的式

の眉あくと云何皆同意之本式と云心也

頓て又禮と云何日記は有り也云と云何

と云何同。種久き事を云何いあす

と云何同。種久き事を云何いあす

と云何同。種久き事を云何いあす

まをこがし引くも云何字の款は記也

あくと云何古いあき何と云何と云何

小袖のしめみ対して云何料理七五の膳款あき何と云何

さ帯下げ帯対して云何あきと云何

若ハきぬと包むあきと云又ひつと云何と云何

何皆本式もあきと云何物ハ何と云何と云何

これら皆今世の何と云何

礼を折と云何人の衣裳あとの袴を外出立のあり

也。何と云何あやふも云何

行列新調は花を折て也云と云何

何と云何







時は田藏田出入殺故日本我夏ニモナイ夏ニ死者曰田  
 藏ト名をうりさればと悪口は死人あらくらよ同ト言  
 傳あそく

阪暖職院也好  
 志のりそを去り  
 女ふありとの中  
 と云ふ我あり  
 系我は系障の  
 むせりふ事れと  
 云女房の相  
 人のめすは  
 には男ハよ  
 女ハをよと  
 あり  
 云ふことハ  
 の中を稱  
 云と稱ハ  
 いらくと云  
 女ハあり

一人のよがすい  
 と云古左様  
 師冠者  
 の風俗を  
 男いよと  
 主人の  
 親  
 女  
 侍  
 女  
 女  
 女

- 一 主人貴人などの私宅に出入あるを光俊と光隆と光来と云ハいやきおぬ一人は入あるを家の光と名心して光の字を付て云又後傳と云いん
- 一 かの者又ハおこづめのみま又おこつみあぐらと云りかこつたまけのみを云くおこづめと云つたはけらと云ん
- 一 式正と云り花のしを式正と云りを終正と云ん是
- 一 家傳の明月記を非古書は終正と云んあり
- 一 仁人又云とある人あぐらと云り是利及時代の書あり人づらわらぬと云ん人の心と云ん







云々食物を調ふる食物を取捨つるの事  
ゆへ食物を料理する事云々食物をかぎつて料理する  
よはあぢやう

一 狗惜クシヤクと云詞古書ありか  
むるを云々志のこしあむ

一 抑留ヨクリウと云詞古書ありあむ  
古書あり

一 古書あり  
字也す  
す

一 ワびと云古き書ありあけ  
見ひる

一 出出といひは  
室町後時代の詞も時代その風俗あり

一 支澄シヤウコといは澄投の事  
叙用といふ引き

一 臨時リンジの事  
荷用カヤウといは

一 冬サン賀ガといは  
冬賀といは



一 ざれごとくいたたまれずしむしき詞は志ぬれぬことなる  
 同しざれごとくふるまひて言初原氏物語の外古書あり  
 一 そげしむる小舎人といふ枕草子ありと云ふことあり  
さげしむるのさげしむる  
 と云ふことあり  
 一 園クナのりクナを古書は孔子と書するあり又定家公の明月記  
定家公の明月記  
 あり  
 一 孔子とありを園のりといふは孔子をよめることあり  
 一 白状と云ふ書札の部は記す  
 一 陳チと云ふ陳の字のついでに言ふことあり何事ともいふ

原氏物語の裏  
 の巻のついでに  
 ついでにの巻の  
 ことかふひか  
 んといふのあは  
 又あはのあは  
 といふことあり  
 章の巻のついで  
 ありといふこと

にありなるを口はしひのついでに陳と書しと云ふは悪事を隠し  
 て能き事といひしむる事なりすなりを陳と書しと云ふは  
 悪事をいひ終らうすふ終らぬ事なり  
 一 あやまること云ふあやまちあるを云ふことあり我悪事を悔  
 いて敬免を請ふをあやまること云ふは非なり  
 一 何と云ふい行くべいあどと云ふはの初は原氏物語枕草  
 子外古書ありなり田舎といふこと云ひありべい  
 一 園と云ふ可の字にキといふ五音通じぬべきこと云ふをいふ  
 一 云也江戸の人と田舎者のべいと云ひを笑ふは非なり  
 一 お志や日といふは作あるの畧語なりお志や日といふは作



又同考よけ  
ことあるへい  
のこま

しあるの畧語こまあると云ハ沸意あるの畧語之皆古  
風の詞今も田舎のいかなりの詞残るたり

いづれと云ハ用もあさむるを云ハ今ハ思ふをする

あるをいづると云ハ沸之徒の字イタラと云ハむし

けうかると云ハ詞古の書あり真ッあるの畧語之

冥かあさ又おかけあさあどと云ハ詞のあさと云ハ意の心

てハあさ冥かあの大あると云ハ

しものるると云ハさうどるる器の字之草字もてハ飛と

書之器ノ字シリゾク  
マカルヤムトも 飛鳥を退る出あどと云ハ皆と云

所を退くと古き書ハ大和(ま)さうる何づの許へ

まのりたるあどと云ハ我家を退て行心といふは

すめりやと云ハもさるを退てきゆをヤと云ハ

古ハ夜廻りも書入あるやと云ハひてありきし

也原氏抄タノ月の書  
ヒヤウひあやと云ハ危也と云ハ戸を

火の用心といひてあやといふは同一詞也

面目といふを古書ハいぬがと云ハ

我子を思息といひせがれと云ハ人おと都日記

我書を陽希と云ハ人品の都日記

元興寺といふハ小見をおとす詞之系都あどと云ハ

詞之江戸といふと云ハいどといふは同一古元興寺



寺と云々寺よどけおありし故の事とそ 元真寺の鬼をみし  
りか 濫りたる事

侍るといふ句は俄と云と同一句也 新出か  
ある句也

見念と云ハ人の心へ来りて對面する事也 又物を人  
に見念する事をも見念に入ると云古の句也

經營といふ句を古書にけいめあり 原氏物語  
つれづれ

如法といふ句をいふ事 いふ事  
いふ事

さんざふらうと云句は老ゆと云う事 いふ事

如法といふ句をいふ事 いふ事

意外といふ句は いふ事

意外といふ句は いふ事

意外といふ句は いふ事

意外といふ句は いふ事

意外といふ句は いふ事

意外といふ句は いふ事

意外といふ句は いふ事

意外といふ句は いふ事

意外といふ句は いふ事

意外といふ句は いふ事

意外といふ句は いふ事

意外といふ句は いふ事

意外といふ句は いふ事

意外といふ句は いふ事

和漢朗詠集の  
待は今日不知  
誰計會 春風  
春水一時未と  
白雲易カ持也  
春風と春水  
水云一時来る  
ハ誰か計ひそ  
一時は風と水と  
會合するやふ











初<sup>トリコウ</sup>は努力の二字を用ひ努力とハカをのりて強ていけむ  
むる<sup>ツキビ</sup>は字心<sup>ツキ</sup>ハカを入て心をやむる<sup>ツキ</sup>は努力  
力の二字をつらてとも云是又心を用てたるこあきこ  
和歌あきよいゆめと斗もよむこ

一 つら<sup>ツキ</sup>と云詞ハ熟の字を書き情の字を用ハ誤也  
未熟はあき念を入をつら<sup>ツキ</sup>と云

一 尾<sup>オコ</sup>筋と云字を音まてビロウとよむ<sup>オコ</sup>は古字元  
か<sup>オコ</sup>一字の訓まてかこ<sup>オコ</sup>とよむ本<sup>オコ</sup>かこ<sup>オコ</sup>の字かこ  
の古あき<sup>オコ</sup>い<sup>オコ</sup>かこ<sup>オコ</sup>本<sup>オコ</sup>字ハ嗚呼とも鳥呼とも  
書<sup>オコ</sup>老学菴<sup>オコ</sup>の筆記<sup>オコ</sup>曰<sup>オコ</sup>蜀人見<sup>オコ</sup>人物之可<sup>オコ</sup>稽<sup>オコ</sup>者

別曰嗚呼字彙<sup>オコ</sup>鳥見<sup>オコ</sup>異<sup>オコ</sup>別<sup>オコ</sup>噪<sup>オコ</sup>故以<sup>オコ</sup>為<sup>オコ</sup>鳥<sup>オコ</sup>呼<sup>オコ</sup>歎<sup>オコ</sup>所  
異也<sup>オコ</sup>又<sup>オコ</sup>堪<sup>オコ</sup>囊<sup>オコ</sup>抄<sup>オコ</sup>應<sup>オコ</sup>神<sup>オコ</sup>天<sup>オコ</sup>皇<sup>オコ</sup>の<sup>オコ</sup>比<sup>オコ</sup>裝<sup>オコ</sup>束<sup>オコ</sup>の<sup>オコ</sup>裾<sup>オコ</sup>と<sup>オコ</sup>云<sup>オコ</sup>物<sup>オコ</sup>を  
尾<sup>オコ</sup>の<sup>オコ</sup>ゆ<sup>オコ</sup>引<sup>オコ</sup>き<sup>オコ</sup>結<sup>オコ</sup>ひ<sup>オコ</sup>を<sup>オコ</sup>戸<sup>オコ</sup>の<sup>オコ</sup>間<sup>オコ</sup>は<sup>オコ</sup>き<sup>オコ</sup>こ<sup>オコ</sup>め<sup>オコ</sup>一<sup>オコ</sup>耐<sup>オコ</sup>尾<sup>オコ</sup>筋<sup>オコ</sup>と  
物<sup>オコ</sup>あり<sup>オコ</sup>し<sup>オコ</sup>より<sup>オコ</sup>え<sup>オコ</sup>づ<sup>オコ</sup>浦<sup>オコ</sup>を<sup>オコ</sup>と<sup>オコ</sup>云<sup>オコ</sup>ハ<sup>オコ</sup>用<sup>オコ</sup>る<sup>オコ</sup>ふ<sup>オコ</sup>た<sup>オコ</sup>る<sup>オコ</sup>目<sup>オコ</sup>本<sup>オコ</sup>紀<sup>オコ</sup>も  
名<sup>オコ</sup>元<sup>オコ</sup>が<sup>オコ</sup>る<sup>オコ</sup>り<sup>オコ</sup>ん<sup>オコ</sup>神<sup>オコ</sup>天<sup>オコ</sup>皇<sup>オコ</sup>の<sup>オコ</sup>比<sup>オコ</sup>耐<sup>オコ</sup>裾<sup>オコ</sup>ハ<sup>オコ</sup>き<sup>オコ</sup>こ<sup>オコ</sup>

一 昔の俗語は物の托<sup>オコ</sup>扱<sup>オコ</sup>の<sup>オコ</sup>字<sup>オコ</sup>を<sup>オコ</sup>支<sup>オコ</sup>持<sup>オコ</sup>と<sup>オコ</sup>云<sup>オコ</sup>古<sup>オコ</sup>書<sup>オコ</sup>も<sup>オコ</sup>元  
たり<sup>オコ</sup>ま<sup>オコ</sup>は<sup>オコ</sup>き<sup>オコ</sup>一<sup>オコ</sup>字<sup>オコ</sup>と<sup>オコ</sup>よ<sup>オコ</sup>む<sup>オコ</sup>字<sup>オコ</sup>と<sup>オコ</sup>人<sup>オコ</sup>の<sup>オコ</sup>降<sup>オコ</sup>備<sup>オコ</sup>あり<sup>オコ</sup>耐<sup>オコ</sup>後<sup>オコ</sup>を  
出<sup>オコ</sup>して<sup>オコ</sup>あり<sup>オコ</sup>と<sup>オコ</sup>人<sup>オコ</sup>の<sup>オコ</sup>詞<sup>オコ</sup>を<sup>オコ</sup>さ<sup>オコ</sup>く<sup>オコ</sup>一<sup>オコ</sup>字<sup>オコ</sup>より<sup>オコ</sup>出<sup>オコ</sup>る<sup>オコ</sup>詞<sup>オコ</sup>は<sup>オコ</sup>  
古<sup>オコ</sup>書<sup>オコ</sup>も<sup>オコ</sup>元<sup>オコ</sup>の<sup>オコ</sup>詞<sup>オコ</sup>を<sup>オコ</sup>  
あり<sup>オコ</sup>詞<sup>オコ</sup>の<sup>オコ</sup>情<sup>オコ</sup>用<sup>オコ</sup>あり<sup>オコ</sup>

一 辰<sup>オコ</sup>を<sup>オコ</sup>ひ<sup>オコ</sup>る<sup>オコ</sup>と<sup>オコ</sup>云<sup>オコ</sup>る<sup>オコ</sup>を<sup>オコ</sup>古<sup>オコ</sup>代<sup>オコ</sup>ハ<sup>オコ</sup>あ<sup>オコ</sup>る<sup>オコ</sup>す<sup>オコ</sup>と<sup>オコ</sup>い<sup>オコ</sup>ひ<sup>オコ</sup>一<sup>オコ</sup>古<sup>オコ</sup>今<sup>オコ</sup>若<sup>オコ</sup>步<sup>オコ</sup>



集字拾遺物語の款古き物語ありしなりと  
いあり名をとり今世女の詞にあはるをすまふ云は  
あり又源順が和名抄は放屁和名倍比流と有り  
是本の詞也

一陰莖をまらると云は逆世の俗語にあはるは古代より

名古今著聞集古事談字拾遺物語の古き  
書にまらるとあり源順が和名抄莖垂類の款は玉莖  
の二字を出して和名をば出さば牛馬蹄の糸は陰脈の  
二字を出して俗に云麻良佐屋とあり此まら順の時代  
まらると云は又今世の世にまららのみをへることといはれ

和名抄は陰囊の二字を俗に布久利と記し陰核の  
二字をバ倍云世傳の古に記したり陰核ハ七の世云  
きんは海の中のうりくことこのうりくを古に魚のこと  
いひしはこれい海らの津を魚のこと云は稱遠にこれ  
らの名おもは実有り何事も古今遠の事あり源  
順ハ村上天皇の比代天曆年中の人古に後志の二  
保延五年四月廿五日郡馬部走り還テ引落敷頼冠  
鞆不殘一物剥取其装束又車等同取之追放敷  
頼相其摩良走入小屋了き又古今著聞集に完  
は取當たる摩良もげられこれいき又云一生不犯の



尼陀羅の時人念佛を勧めれども念佛せざして摩  
良がうりくと唱あらず死なば云々

一 人の安否を問ふ詞は貴人より法様嫌能といひ上掌  
小は勇健といひを次より法堅勝といひ等閑より  
法堅固といひ下輩小は法堅平といひて上中下の次  
身を分るより古代より名を無き今の世の風俗にて  
忍のゆゑ云々何者の語て定りしるるは不審

一 入眼ニツギといふ詞古きより作り物事の成就あるるを  
眼ニツギといふは画工の筆を著より出する詞人形  
獸等を画づく可き眼の中は瞳子を懸せざして彩色

ことごとく終て後は眼中に瞳子を入れ之又木偶念  
も其眼を作り彩色終て瞳子を入るは佛像は瞳子  
を入れ再眼といふ是又入眼これらより不雅といふ  
物事の成就あるるを入眼といふ

一 濫吹ランソウといふはみづるに傳をいふるに古より作り  
香カウを嗅カぐるを香を嗅ぐといふ是香のあはるにあり  
かぐといふも穢しき詞といはるる海老物語梅づ元の

合タカせの糸タカ云わうこそいづくもちをつむろくも  
多めれ人このむよ合せぬいつるものさあはくをかき  
ありせぬるよはけうあるこそおわりのきき香をかぐと







